

西村先生退官リレーシンポジウム、開催！

The Symposium around Prof. Nishimura was held!

text_NAKADO/M1



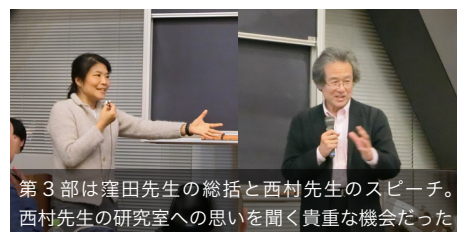
2017 年の末、12 月 21 日に、西村幸夫先生退職記念行事の第 1 弾（全 3 回）、リレーシンポジウムその 1『個性を育む都市デザイン その研究・実践を展望する』が開催されました。場所は工学部 2 号館 221 講義室。定員の 200 名あまりが全て埋まり、急速追加の椅子を用意するほど多くの方が集まりました。今月号では、退職記念行事の裏話を紹介します！（シンポジウム当日の様子は、WEB マガジンにて M1 の松本がレポート。そちらも合わせてどうぞ！）



今回のシンポは 3 部構成。第 1 部では、遠藤先生・クリス先生・中島伸先生が自身の研究を報告



第 2 部はパネルディスカッション。都市デザイン研の外からの視点に、はっとさせられた



第 3 部は窪田先生の総括と西村先生のスピーチ。西村先生の研究室への思いを聞く貴重な機会だった

退職記念行事の裏側

－ 永野助教に聞く －



西村先生ご退職にあたっての各イベントは、「西村幸夫先生の退職記念行事実行委員会」が企画しています。今回は委員会メンバーの一人である永野助教に、企画の裏側をお聞きました。

Q. イベントはどのように企画されているのですか？

窪田先生、中島直人先生、中島伸先生、松井先生、森先生、そして私永野と萩原さんの 7 人が実行委員会の幹事で、906 で議論を重ねている。幹事メンバーはおよそ 1 年半ほど前から動いている。

都市デザイン研究室になったのも西村先生からなので（それ以前は都市設計研究室）、その総括をするという意味でも、連続講義のような一連のイベントを通じて西村先生及び都市デザイン研の活動・思想の総体が伝

えられればいいなと話し合っていた。

シンポジウムで西村先生に関わりのある人が自分の研究について語るという形式になったのは、西村先生自身が自分の業績の多くを語りたがるような方ではないというもある。最終講義の前段は、先生のもとで学んだ人たちが現在の仕事を語ることで先生の残してきたものを間接的に浮かび上がらせよう、というのでこの形になった。

Q. 今回のテーマはどのように決まったのですか？

タイトルは西村先生から提案いただいた。委員会チームは都市保全・まちなみ保全をテーマに考えていたが、西村先生から「個性を育むといったところに出てほしい。それが今後の進むべき道だ」という言葉をもらいこのテーマになった。副題は、「学」の立場で重要な研究と実践ということにどう折り合いをつけているのか登壇者の方々に話していただこうということ。

登壇者は、研究室の広がりを紹介するということで各世代を代表する教え子の面々に解題をお願いした。遠藤先生（工学院大学）、クリスチャン・ディマー先

生（早稲田大学）、伸先生（東京都市大学）という都市デザイン研出身の 3 世代の先生のプレゼンと、なるべく内輪の会にならないよう、それぞれの世代のカウンターパートとなるように、真野先生（東京工業大学）、川添先生（東京大学）、山口先生（京都大学）という西村先生や研究室の先生方と関わりのあった方々にオファーしてディスカッションしてもらった。

Q. 裏方として大変だったことはありますか？

会場と曜日の設定は悩んだところ。平日で何人来るか読めなかった。ちょっと多いけど集客頑張って 200 人を目指そう！と 2 号館の講義室にした。大変だったのはそれくらいかな。次の 3 月の方がもっと大変になると思う。あ、あとは先生方がなかなか発表資料を用意してくれなかったことかな（笑）。

Q. まだ発表していないことがあれば教えてください。

今までのマガジンを製本した統合版を先生に渡す贈呈式を考えている。やはりマガジンは研究室としての重要な側面だから、公の場での贈呈を西村先生も希望されると思う。編集部的小伙伴们お願いします。 ■

過去最大の忘年会！

シンポジウム後、鳳明館・大広間にて集合写真



年の瀬のこぼれ話

恒例の鳳明館での忘年会、西村先生最後の年ということでもたくさんの OB・OG が駆けつけ大盛況に。「忘年会」は最後だけれど、今年からは窪田先生発案の「西村幸夫を囲む会」が開かれるとのこと。

次回のシンポジウム、最終講義のご案内

次回の退職記念イベントは、3 月 16 日（金）に開催されるリレーシンポジウムその 2・その 3、及び西村先生最終講義です。是非ご参加ください。

▶▶▶ http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/news/2017/2018_3.php



今年度の都市デザイン研究室マガジン連載企画である西村先生の『自著を語る』コーナー、今回が最終回となります。今までの先生の著作の数々について、ご自身に当時の思い出や出版への思いを語っていただきました。最後に紹介するのは

唯一の「都市デザイン研究室編」でもある『図説都市空間の構想力』です。マガジンの一企画であるにも関わらず、1500字以上もの思いのこもった寄稿をいただきました。ぜひご一読ください。



台湾・蘭嶼にて、地元のマイノリティの方にヒアリング中、1990年頃

『図説 都市空間の構想力』

各年代でテーマをもって仕事を進めてきた私にとって、50代のテーマは判断が難しかった。国内的なテーマか国際的なテーマか、短期的テーマか長期的テーマか、実際のテーマか理論的テーマか、などのほか、単独作業か集約的作業か、という選択肢も考えた。思い定めたテーマは、後進の才能を後押しするために多くのメンバーに本執筆の機会を提供することと、都市の読み取りの段階から組み立てる都市デザインの方法論を確立することだった。両者がうまく融合して生み出すことができたのが、『図説都市空間の構想力』（学芸出版社、2015年）である。

この本は唯一「東京大学都市デザイン研究室編」として世に出た本でもある。具体的に執筆したのは研究室に教員として所属していた計7人であるが、図面作成等にかかわってくれたのは他に40人にのぼる。全員の氏名は181頁の協力者一覧に掲載してある。10年以上にわたり文字通り研究室の総力を挙げて取り組んできた各地の研究プロジェクトを題材に、その都市空間の構想力を読み解くという趣向の書籍である。読解の成果を雄弁に物語るのは他ならぬ図面であ

り、図面を作成してくれた研究室のメンバーの努力が本書の肝である。だから研究室編著として、書名にも「図説」と入れることにした。図版を朱と墨の二色にしたので、図面作業も二倍になってしまい、大変だったと申し訳なく思うこともあるが、苦勞してくれた分、図版が雄弁に物語ってくれているのではないだろうか。

都市デザインの問題を、川下ではなく川上から考えるというのは、大学の人間として考えたひとつの方法論であった。それはまた、研究室において地域に入り込み、地域理解を深めるために研究室内で長年受け継がれてきた調査の方法論であった。こうした方法論は、計画技術としては研究室内で受け継がれてきていたものの、文字化されていかなかった。ノウハウとして受け継がれてきた技法を意識化して、広く世に問うことによって、場所性を尊重しながら普遍的な空間構築に至る方法を打ち立てることができるのではないかと考えた。名著『日本の都市空間』や『集落の教え100』が普遍的な空間論構築へ向けたエネルギーを燃やし続けているのに対して、より場所性に依拠した空間論を打ち立てられないかと思った。『構想力』は私たちなりの答えであった。幸いにも2017年11月の段階で3刷が決まり、専門書として上々の出発となった。また、韓国語訳が決まったこともはげみになった。

この延長線上に、より多くの著者のそれぞれの都市とのかかわりを、読解という行為を通して紹介する『まちを読み解く』（朝倉書店、2017年）を発表した。また、私自身としても、これまで書き溜めてきた文章や対談・講演録を2冊本にすること（『文化・観光論ノート』・『西村幸夫対談・講演集』（いずれも仮題）鹿島出版会、近刊）のほか、都市の読み取りから将来を展望する作

業ノートとして47の都道府県庁所在地の都心空間を歩きながら読み解くということを企画した『県都物語ー47都心空間の近代をあるく』（仮題、有斐閣、近刊）を準備中である。

後者の本は、2010年に有斐閣のPR誌『書斎の窓』に連載するところから考えはじめ、その後、もう一度じっくりと県都を歩きなおし、市史などの資料をたどって、書き下ろしたものである。

じつは私は研究室マガジンの174号（還暦記念号、2012.7.10）にこのことをそれとなく触れていた。以下、引用すると、

「・・・で、65歳までの目標は？——ここでは書かないことにします。ただ、それが65歳になったときに、皆さんにわかる形で示したいと思っています。皆さんへの新しいメッセージというのが目標です。お楽しみに。」（174号1頁、中段右「西村先生からのコメント」）

この『県都物語』こそ、マガジンで触れた私からのメッセージである。58歳の時に着想を得て、それからスタートさせて、還暦を過ぎてもここまでの仕事はできるということを示すことができたとなると、少しは満たされた気持ちになる。文献博覧の努力の跡が参考文献に垣間見られるのではないかと思う。日々の雑務の間に県都を歩き、県立図書館で郷土資料を閲覧する中で見えてきた都市の姿を私なりに描こうとしている。県都の現場をあるく時間を造るのが大変だったが、それも今思い返すと、楽しい思い出である。

こうしたことを成し遂げることが私の生きるエネルギーになっている。だから今後も世の中に都市の魅力を伝えるために書き続けていこう。

西村幸夫

『図説都市空間の構想力』

「都市空間とは、無数の主体によって歴史の中で蓄積されたものとして現在に伝えられた、その場所における空間的関与の総体である」空間が形成された意図を読み解く。学芸出版社、2015年刊。



『まちを読み解く - 景観・歴史・地域づくり -』

『まちの見方・調べ方』の姉妹編。「事実を知る」「現場に立つ・考える」「現象を解釈する」の3部構成で、まちを読解し、それを元にした地域づくりを進めるための本。朝倉書店、2017年刊。



Information

Archives - 1月のweb記事



退官シンポまとめ

12/21
昨年末に行われた退官シンポジウム第1弾の内容を今年度後期から新しく入ったM1松本が詳細に報告（M1松本）



大学院演習 最終発表

1/17
高島平演習に参加したジャンさんが報告。ちなみに英語が苦手なデザ研M1は言語の壁を感じたような...（D1ジャン）



高島平ヘリテージミーティング

1/18
今回は2018年初のヘリテージプログラム。高島平の町会長を囲み、新たなまちの魅力を聞くことができました。（M1但馬）

Project Headlines -PJ 近況早わかり-

Web記事もご覧ください。▶



Hey listen, -ちょっと聞いて！

修論対象地での提案がコンペ入賞！



シエルトインターナショナル学生設計競技にて最終審査でのプレゼンの末、入賞しました。今後計画を実現化していくべく、密かに動き始めています。提案詳細はHPをご覧ください。（M2田中）

西新宿アクティビティ調査 終了！



1月の寒空の下、多くの学生の協力を得て5日間に渡るアクティビティ調査を終えました。3月のビルオーナーや設計者との議論に向け、データの整理・分析を進めていきます。（小泉研M1澤山）

2月の予定

- 2/5,6 修士論文ジュリー
- 2/9 上野 第4回会議
- 2/14 卒論卒制発表
- 2/17-20 三国 現地調査
- 2/27 UDC コンペ入切
- 2/27 研究会会議（西村先生 最終）

✂編集後記

中々直らない悪い癖の一つが、期限が近づくまでものごとを始められないこと。いつもデッドラインぎりぎりまで生きてきましたが、ついに痛いのを見ました。締め切り直前にパソコンが壊れたのです。まさかこんな都合の悪すぎる自分が自分の身に降りかかるとは思っていませんでしたが、完全に自業自得。日々の自堕落さを久しぶりに猛省しました。この先も降りかかってくる締め切りの嵐、自分一人で厳しく計画的に処理していこうと思っています。きっとそれができればよいと思っています。（中戸）